

ニューヨークとアメリカ東海岸名門大学の教育・研究事情

齋藤 基一郎^[1]

植草学園大学保健医療学部

A Report on Education and Research Practices at Prestigious Universities in New York and on the Eastern Coast at the United States.

Kiichiro SAITO Faculty of Health Sciences, Uekusa Gakuen University

アメリカ東海岸とニューヨークにある名門大学の教育と研究事情について最近の知見をもとに報告する。アメリカの名門大学では教育にお金を惜みなくつぎ込み、国籍や人種を問わず優秀な人材には高度な教育と研究環境を提供している。このことが、アメリカ合衆国が、現在世界をリードし、世界の指導的立場にあり続け、世界を牽引する原動力になっている。日本の若い学徒も発展した諸外国での教育と研究生生活を一度は体験した方がよい。

キーワード：アメリカ合衆国，東海岸，名門大学，教育と研究の現状

In this articles, the author describes the education and research practice at the prominent Universities in N.Y. and on the eastern coast at the United States of America. These Universities are to become at truly global Universities education leaders and advancing the frontiers of knowledge not only simply for the United States, but also for the entire world. The Universities offer sufficient finances to cover all the expenses(travel and living allowance) and stipend for research and study during the regular academic education and they also give a diverse exciting global environments in which study. For all Japanese students, it is better to provide an opportunity to go abroad for study, for research or for an internship during his/her young year University experience in Japan. Also, it is necessary to prepare financial resources which will be made available to make this possible for those on financial aid.

Keywords: New York and Eastern Coast of America, Prestigious University, Education and Research Practices

1. はじめに

2010年9月9日、成田国際空港発午後3時10分のデルタ航空（DL172便）のアメリカ行き直行便は13時間の空の旅の末、ニューヨーク、ケネディー空港（JFK）に到着した。機内では理由も解らずにエコノミークラスからビジネスへとグレードアップしてくれたので、お酒は飲み放題、マッサージ付きリクライニングシートで空の旅を十分楽しむことがで

き、疲労感や時差ぼけ、エコノミー症候群にも罹らなかった。しかし、機内で無料の赤ワインをしこたま飲みすぎた為か到着寸前に急性胃腸炎を思い、腹部に燃えるような痛みを感じ、せっかくの機内食もまったく手を付けずじまいであった。アメリカの友人から後で聞いて解ったが、ワインは酸度が強く、また機内の気圧がかなり高いので乗客は皆これでやられるとの事だ。

私は1973年2月から1カ月間を掛けて厳冬のアメ

[1] 著者連絡先：齋藤基一郎

リカ大陸を東海岸から西海岸までグレイハンドバスを乗り継ぎひとりで横断し、アメリカの大学を訪問した経験がある。スイス・チューリッヒ大学脳研究所への2年間の留学を終え家族と当地で別れて、ヨーロッパからアメリカ東海岸にあるボストンへ行き、アメリカ大陸を横断後、西海岸サンフランシスコ経由で帰国した。当時から沢木耕太郎氏^{1~13)}や小田実氏^{14~24)}の異文化の世界と放浪の旅に私はある種の憧れを持っていた。

アメリカ大陸は、ソ連、中国大陸と同じく広大であり、その面積は日本国の25倍もある。ニューヨーク～ボストン間は直線距離にして約300 km、ロスアンゼルスとサンフランシスコは560 kmも離れている²⁵⁾。アメリカ東海岸から西海岸までの距離は約5,000 kmもあり、車で4日間、飛行機で5時間もかかり、時差が3時間ある。成田からニューヨークまでは直行便で13～14時間はかかる。私はよくもこんなバカでかい国と日本は戦争をしたものだと思った。

さて、JFK国際空港には、事前の約束通り、Dr. ロバート・マッケルとその息子が車で出迎えに来ていた。

アメリカ東海岸の大西洋沿岸と平行に走る高速道路を車で北上すること2時間半で名門イエール大学のあるニューヘブーン市に到着、その後、さらに北上すること1時間半で東海岸線の臍に相当する地点、ウエストブルックに到着した。ここを彼と各大学訪問のための10日間の根拠地とした。彼の家から更に高速道路を300 km北上するとハーバード大学、マサチューセッツ工科大学 (MIT)、ボストン大学があるボストンへと至る。ニューヨークへは250 kmの南下で、ワシントンDCには550 kmの南下で行ける。アメリカの高速道路はよく発達しており、左右6車線～8車線のハイウェイも珍しくはなく、日本の様にこまこました料金所が幾つも有り、いつの間にか大金を取られるような仕組みには成っていない。道路は右側通行で、日本の都市に比べ駐車場が多く、しかも料金が安い。そこに車社会の利便性が感じられる。車のスピードはマイルで表示されているが、スピード制限をkmに換算すると、東部から中西部にかけては104 km/時の州が多く、西部では112～120 km/時で、制限なしの州もある。一

般のハイウェイや市内での制限時速は通常56km～88km/時である。アメリカでは町から町までの距離が500～1000 km単位でかなり遠く離れているが、日本のように数10 kmで隣の町に着ける訳ではなく、ヨーロッパのように100km単位でヒトが車で移動するに適した距離でもない。

アメリカ合衆国は移民の国である。現在での合法移民の数は2000万人で、不法移民は1200万人とも言われている。1840～1890年にゴールドラッシュが始まり、1850年頃、中国人次いで日本人の移民が流入した。当初、労働力の不足に悩んでいたアメリカは日本人の移民の受け入れは初めは歓迎されていた。そのうち、日本人の移民の低賃金と勤勉さがアメリカ人労働者の生活を圧迫するようになり、ついに、1889年の移民制限法によって中国人が、ついで日本人が移民することを禁止する排日移民法が1923年に議会で可決した。

ヨーロッパ大陸から1900年代以降には自由・平等・博愛を求めアメリカの玄関口に立つ自由の女神を目指し命がけで大西洋を渡って多くの移民がアメリカ大陸に入った。当時のアメリカでは（日本の江戸時代に相当）東海岸から西海岸に移住が進み、サンフランシスコ、ロスアンゼルスなどの西部沿岸線（太平洋側）が開拓された。1965年代の移民の波はヒスパニック系であり、現在でも中南米とメキシコからの移民の低賃金と重労働でアメリカの社会と経済は成り立っている。

2. ニューヨーク

出迎えのDr. ロバート・マッケルとはNYのロックフェラー大学で逢ってから13年ぶりの再会である。当時10歳の長男は23歳の立派な青年（大学生）に成長していた。また、彼によれば、彼の上司であったロックフェラー大学の神経生理学教授・浅沼広先生（わたしはイーストリバー沿いにある先生のご自宅で前回はバイオリンを聞かせてもらったが・・・）はすでに鬼門の人となっていた。先生は運動生理学の方面で数々のすばらしい業績を残され、優秀な沢山の日本人神経生理学者を育てて下さったので先生のご逝去は残念無念で、誠に寂しい限りである。

Dr. ロバート・マッケルとはスイス・チューリッ

ヒ脳研究所以来の半世紀にわたる親友である。彼が住んでいるコネティカット州のウエストブルックからニューヘブンのイエール大学まで各駅停車の通勤電車（Commuter Railroad）で37分、そこで乗換え、NYのグランド・セントラル駅まで約1時間で行ける。ニューヨーク市はマンハッタンを中心にして、ブルックリン、クイーンズ、ブロンクス、スタテン島の5区からなっている。マンハッタンは道路が碁盤の目のようになっており、南北に走るアベニューと東西に走るストリートとであるから非常に解りやすい。ロックフェラー大学やグランド・セントラル・ターミナル駅はミッドタウンにある。この駅はニューヨーク市の2大ターミナル（他はペン駅）の一つであり、1871年に建てられたが、1903年から10年がかりで新しいターミナルをさらに地下に2層加えて新設し、名前をグランド・セントラル駅とした。42丁目の正面玄関には羽つき帽子を被ったマーキュリー像を中心として、右に知の女神ミネルバ、左にヘラクレイトスの彫刻と時計がシンボルとなる明るくてとても素晴らしい広大な駅ビルが地上と地下1階に完成した。世界でも有数のこの巨大駅ビルでは一日に500本以上の列車が発着し、50万人以上を超える乗客を運んでいる（東京駅は38万人）。地下1～2階から近・中距離電車が出る。地下2階からイエール大学があるニューヘブン行きの各駅停車の通勤電車が発着している。しかし、地下2階は、地上階や地下1階の華やかな雰囲気とはがらりとかわり、100年前の状態のままで取り残され、剥き出しのコンクリート、薄暗い電灯、汚く短いプラットフォーム、旧式な電気列車(commuter trains)が毎日沢山の労働者を地下2階に運んでくる。華やかで美しい地上階や地下1階と比べて想像すらできない。これが、高度に発展した現代の資本主義アメリカ合衆国、ニューヨーク・マンハッタンの現実である（写真1）。

3. ニューヘブン

イエール大学があるコネティカット州のニューヘブン市は、ニューヨークの北東250 km、ボストンの南西550 kmのところにある。人口12万5千人の歴史あるアメリカ東海岸の港湾都市である。イエー



写真1. マンハッタンは、東京の山手線内ほどの広さの縦長な島で、超高層ビルが乱立し、世界経済の頂点を成す巨大都市である。

ル大学はアメリカ屈指の名門校であり、医学・人文理工学系など合わせて、12のカレッジからなる総合大学で、ニューヘブンの町自体が大学町であり、医学系と文理工科系地域に鉄道路線を境にして2分画されている。イエール大学の教授陣は2,000名からなり、各分野の指導者として活躍している有名な研究者でもあり、日夜、研究と教育に力を注いでいるが、その多くは入門レベルのクラスまでも担当している。この大学は世界の超一流大学であるハーバート大学やロックフェラー大学とともに肩を並べて成長し続けている。イエール大学に所属する1万1千人の学生は米国の50州と世界110以上の国々からくる留学生達である。留学生たちは、財政的必要性を考慮の対象としない選抜方針によって入学が許可されており、大学からは在学費用を賄うに十分な学資援助が必要度にに応じてなされている。この大学の教育方針は外国からの留学生でもアメリカ合衆国からの学生達と同等の条件で学資援助を与え、最も優秀

な学生を世界中から集め教育している²⁶⁾。1930年代の初めに設立された学寮制度もイエール大学独特のものである。この学寮制度は、英国のオックスフォードやケンブリッジといった中世の英国の大学を規範としており、それぞれ約450名からなる学生を市街地内に点在する12の独立したイエール大学の学生寮に振り分け住まわせることによって、伝統ある大学の雰囲気や学生に体験させ、一流研究大学の幅広い人材や物的資源を学生に触れさせる機会を与えている(写真2)。ニューヘブレン市街地の中央には、イエール・グリーンと呼ばれる長方形をした中庭が配置されている。この快適な生活空間で、学生達はお互いに寝食を共にし、交流し、さらにいろいろな学習活動、課外活動を通じて、自己研鑽ができる仕組みになっている。それぞれのグループには学寮長、学生監督、それに寮友として多くの教授が参加している。また、独自の食堂、図書館、セミナー室、娯楽室等の施設が完備している。日本の現状と比較して、このような教育システムと生活環境の十分な整備は誠に羨ましい限りである。



写真2. イエール大学正面玄関前にて、Dr. Emily Mackel と著者。

4. ボストン

マサチューセッツ州の州都ボストンはイギリス植民地からの独立の発端となった歴史のある町なので、多くのアメリカ人にとっては心の故郷(ふるさ

と)でもある。チャールス川を挟んだ北側にはハーバード大学、マサチューセッツ工科大学(ノーベル賞受賞者利根川進氏が所属)、川の反対側にはボストン大学など60近くの大学があり、それらは皆超一流大学である。ボストンはアメリカ発祥の地ゆえに歴史的建築物が多いが、他のアメリカの町とは異なり地下鉄は良く発達しているが、通りが基盤の目のようには走っていない。1636年に創立されたハーバード大学は13のカレッジから構成されている。学生と教職員の数は18,000人で、世界の100ヶ国以上から留学生が集まってきている。世界的に有名なボストン美術館はパリーのルーブル、サンクトペテルブルグのエルミタージュ、ニューヨークのメトロポリタン、マドリードのプラド、フィレンツェのウフィツィー、イギリスの大英博物館と並ぶ世界最大級の美術館のひとつである。フィラデルフィアにはペンシルバニア大学が、バルチモアにはジョンホプキンス大学が、ワシントンDCにはスミソニアン協会所属の美術館と博物館がある。

以上述べたアメリカ東部の有名大学のすべては世界をリードする医学生物学系のトップクラスの大学であり、大学の規模や設備、教授陣、学生の質も最高である。ちなみに、アメリカ国籍のノーベル賞受賞者は233人に対し、アジアでトップの日本人は僅か18人(平成22年10月現在)で、その数は極めて少ない。その理由として、アメリカの名門大学では教育にお金を惜しみなくつぎ込み、既に述べた通り国籍や人種を問わず優秀な人材に高度な教育を提供している。このことがアメリカ合衆国が世界をリードし、世界の指導的立場にあり続け、世界を牽引する原動力になっている。ヨーロッパや北欧、共産主義国、インド、アジアの諸国、ラテンアメリカの諸国の現状とはこの点が異なっている^{27~37)}。

最近の日本では、若手研究者が内向的になり、研究の中心地とも言えるアメリカで修業する若手が少なくなり、そのほとんどは外国に出て行かず、国内の大学や研究機関で仕事を希望する数が増えてきている。今の日本の社会では国際舞台で活躍する若手研究者の育成が急務であるが、なによりも問題なのは、次世代を担う若手が希望と情熱を失っており、新たな挑戦をしなくなったことである。日本の社会が成熟期に入った為か若者はリスクを冒すことを避

け、安易で平坦な人生行路で安心しようとする。私は冒険心の喪失こそが今、日本が直面している最大の危機であると思う。ちなみに、アメリカ合衆国で博士号を得る外国人留学生の出身国が日本人では約2%, 中国人の約30%, 韓国人の約10%で、海外で国際的に切磋琢磨する若手日本人の数は次第に減少してきている。ごく最近、米国際教育研究所が発表(11/15)した米国の大学の外国人留学生数は、中国が前年度比29.9%増の約12万人でトップとなり、8年間トップだったインド(約10万人)を抜いて首位に帰り咲いた。日本は15.1%減の約2万4800人で6位にさがり、日本人留学生の数は5年間連続して減少した³⁸⁾。また、日本の大学の国際的評価が下がり始めていることや日本の科学研究費予算が厳しい財政状況下で伸び悩んでいることも気掛かりだ。これとは反対に欧米諸国では、科学技術の研究開発の為に公的研究資金投入が増加している。最近のニュースでも、日本人のノーベル賞受賞者(根岸英一教授と鈴木章教授)の仕事はアメリカ留学時代になされたものである。彼らの共通点は若い頃にアメリカに留学し、良きアメリカ人の指導教授にも恵まれ、厳しい研究生生活を経験していることである。この点で日本は激烈な世界の研究競争に現状のままでは取り残されてしまうのではないかと心配しているが、これは老いの躁言なのであろうか。

5. 文献

- 1) 沢木耕太郎. 深夜特急. 第1便(黄金宮殿), 新潮社. 1986, 1-314.
- 2) 沢木耕太郎. 深夜特急. 第2便(ベルシャの風), 新潮社. 1986, 1-297.
- 3) 沢木耕太郎. 深夜特急. 第3便(飛光よ, 飛光よ), 新潮社. 1992, 1-341.
- 4) 沢木耕太郎. 深夜特急. 1 香港・マカオ, 新潮社. 1994, 1-238.
- 5) 沢木耕太郎. 深夜特急. 2 マレー半島・シンガポール, 新潮社. 1994, 1-223.
- 6) 沢木耕太郎. 深夜特急. 3 インド・ネパール, 新潮社. 1994, 1-226.
- 7) 沢木耕太郎. 深夜特急. 4 シルクロード, 新潮社. 1994, 1-204.
- 8) 沢木耕太郎. 深夜特急. 5 トルコ・ギリシャ・地中海, 新潮社. 1994, 1-247.
- 9) 沢木耕太郎. イルカと墜落, 文藝春秋. 2002, 1-230.
- 10) 沢木耕太郎. 深夜特急. 6 南ヨーロッパ・ロンドン, 新潮社. 1994, 1-243.
- 11) 沢木耕太郎. 1号線を北上せよ, 講談社. 2003, 1-330.
- 12) 沢木耕太郎. 1号線を北上せよ, ベトナム街道編, 講談社. 2006, 1-281.
- 13) 沢木耕太郎. 旅する力: 深夜特急ノート, 新潮社. 2008, 1-289.
- 14) 小田実. アメリカ: 長編小説, 河出書房新社. 1962, 1-315.
- 15) 小田実. アメリカ, 河出書房新社. 1962, 1-315.
- 16) 小田実. ベトナムのアメリカ人: 残虐行為とその意味, 合同集出版社. 1966, 1-249.
- 17) 小田実. 小田実全仕事2. アメリカ, 泥の世界, 河出書房新社. 1970, 1-405.
- 18) 小田実. 小田実全仕事7, 河出書房新社. 1970, 1-430.
- 19) 小田実. 小田実全仕事8, 河出書房新社. 1970, 1-423.
- 20) 小田実. 小田実集, 河出書房新社. 1972, 1-359.
- 21) 小田実. アメリカ, 角川文庫. 1976, 1-606.
- 22) 小田実. 市民の文, 岩波書店. 2005, 1-301.
- 23) 小田実, 木戸衛一編. ラディカルに〈平和〉を問う, 法律文化社. 2005, 1-246.
- 24) 小田実. 小田実全集アメリカ, 小説第3巻, 2010, 1-577.
- 25) Road Atlas United States/Canada/Mexico/ 48th Annual Edition, Rand McNally&Company. 1972, 1-129.
- 26) イェール大学, Yale University 国際広報誌. 2003, 1-4.
- 27) 齋藤基一郎. チューリッヒ脳研究所留学を終えて, 日大医学雑誌. 1973, 32 (7): 733-736.
- 28) 齋藤基一郎. 冬のヨーロッパにて, 東京都神経科学総合研究所紀要. 1977, 3, 2-6.
- 29) 齋藤基一郎. 海外留学の意義—西独逸ゲッチンゲン大学で考えたこと—, 筑波大学 脳神経外科学年報. 1985, (1) 52-54.
- 30) 齋藤基一郎. 中国の印象 (1) 瀋陽市と中国医科大学, 筑波大学紀要. “Students”, 1987, 214: 5-7.
- 31) 齋藤基一郎. 中国の印象 (2) 北京・上海, 筑波大学紀要. “Students”, 1987, 215: 5-8.
- 32) 齋藤基一郎. 中国大陸の東北寒村でみつかった毛むくじゃらの子供(毛孩)—人類の先祖戻りの現象化か—,

- 医学の歩み. 1989, 148 (7) 483-484.
- 33) 齋藤基一郎. 日中医学交流—中国医科大学を中心として—, 日中医学. 1990, 5 (1) 20-30.
- 34) 齋藤基一郎. 中米コスタリカ大学に派遣されて, 筑波大学紀要. "Students", 1993, (343) 4-5.
- 35) 齋藤基一郎. 第8回国際プラスティネーション学会(オーストラリア・ブリスベン)に参加して, 茨城県立医療大学紀要. 1997, (2) 131-133.
- 36) 齋藤基一郎. 中米コスタリカ大学における電子顕微鏡と脳の超微形態学に関する研究指導報告書, 日本政府と国際協力事業団, 1995, 1. 1-21.
- 37) Robert Mackel. Developing higher education in a small country: Opportunities, constraints, evaluation. L' AVIR UNIVERSITAIRE DV LUXEMBOURG LES AMISKUNLUX. LUXEMBOURG edited by J-P. Harpes. 2002, 98-102.
- 38) Institute of International Education, IIE(米国国際教育研究所発行) Open Doors Data 2010, U.S.Study Abroad; Leading Destinations, Report on International Education Exchange provides a long-standing, comprehensive statistical analysis of academic Mobility between the United States and the nations of the World. 2010, 11, 15. (読売新聞夕刊 2010, 11/16, 2).